

Puccini *La Bohème*

Opera in four acts

Conductor: James Levine

Mimi: Anna Netrebko, Musetta: Susanna Phillips, Rodolfo: Piotr Beczala (June 4, 8 & 11) / Joseph Calleja (June 17 & 19),
Marcello: Mariusz Kwiecien, Schaunard: Edward Parks, Colline: John Relyea, Benoit & Alcindoro: Paul Plishka

【上演時間 約3時間 / 休憩2回含む】

Approximate Running Time: 3hrs. / two intermissions

指揮: ジェイムズ・レヴァイン

演出・装置: フランコ・ゼッフィレリ

衣裳: ピーター・J・ホール 照明: ジル・ウェクスラー

予定される主なキャスト (変更になる場合がございます)

ミミ(S): アンナ・ネトレプコ

ムゼッタ(S): スザンナ・フィリップス

ロドルフォ(T): ピョートル・ベチャワ (6/4, 8, 11)

ジョセフ・カレーヤ (6/17, 19)

マルチェッロ(B): マリウシュ・クヴィエチエン

ショナール(B): エドワード・パークス

コリーネ(B): ジョン・レリエ

ペナ&マルチンドロ(B):

ポール・プリシュカ

◎あらすじ

華の都パリで、貧しくとも意気揚々と暮らす若い芸術家の卵、ボヘミアン達。詩人のロドルフォとお針子のミミは、クリスマスの夜に出会い恋に落ちる。しかし2人と、その友人達との楽しい時は短かった。病に冒されたミミに良い暮らしをさせようと、心変わりをしたふりをしたロドルフォ。切なく別れた2人。しかしミミは最期の時、やはり愛する人の腕の中へ戻って行くのだった。

◎みどころ

「ラ・ボエーム」は、もちろんあの名匠ゼッフィレリの演出と舞台美術によるMETの定番だ。豪華絢爛な舞台も見もので、第2幕のクリスマス・イヴのカフェ・モミュス前の場面など、まさに大群衆の渦である。また第3幕での、しんしんと降り続ける粉雪に霞む街路の光景は、ため息が出るほど美しい。ミミとロドルフォの別れの



歌が最高潮に達するとき、一度止んでいた雪がまた激しく降り始めるあたり、永く忘れられない場面だろう。第4幕でも、ミミを囲む仲間たちの悲しみの表情が深い感動を呼ぶ。

これら微細なニュアンスに富んだ素晴らしい舞台の中に、名花アンナ・ネトレプコが演じ歌うミミを日本で初めて見られるのは、大きな喜びだ。しかもその恋人役ロドルフォを、人気のピョートル・ベチャワとジョセフ・カレーヤがダブルキャストで歌うというのも、何ともぜいたくな配役である。 東条碩夫 (音楽評論)

ゼッフィレリの演出、ネトレプコのミミ…これ以上を望むべくもない
豪華絢爛なMETの舞台!

プッチーニ ラ・ボエーム 全4幕



Verdi Don Carlo

Opera in five acts

Conductor: James Levine

Elisabeth of Valois: Barbara Frittoli, Princess Eboli: Olga Borodina, Don Carlo: Jonas Kaufmann
Rodrigo: Dmitri Hvorostovsky, Philip II: René Pape, The Grand Inquisitor: Stefan Kocán

【上演時間 約4時間15分/休憩2回含む】

Approximate Running Time: 4hrs. 15min. / two intermissions

指揮: ジェイムズ・レヴァイン

演出・装置: ジョン・デクスター

舞台美術: デイヴィット・レッパ

衣裳: レイ・ディッフェン

照明: ジル・ウェクスラー

ステージ・ディレクター: スティーヴン・ピックオーヴァー

予定される主なキャスト (変更になる場合がございます)

エリザベッタ(S): パルバラ・フリットリ

エボリ公女(Ms): オルガ・ボロディナ

ドン・カルロ(T): ヨナス・カウフマン

ロドリゴ(Br): デイミトリ・ホロストフスキー

フィリッポ二世(B): ルネ・パーペ

宗教裁判長(B): ステファン・コーツァン

◎あらすじ

スペインが「無敵艦隊」を世界中に派遣していた時代の王フィリッポ2世の息子ドン・カルロは、フランスの王女エリザベッタと恋に落ちる。しかし彼女は絶大な権力を持つ父王の妃となってしまった。傷心の悲しみの中にも、親友ロドリゴの友情と助言を入れて、国民のために生きようと決心するドン・カルロだったが…。多彩な声の魅力で堪能できる壮大な歴史絵巻。

◎みどころ

「えっ? そんなの信じられない!」と誰もが驚く超豪華顔ぶれ。いったい世界のどの歌劇場が、こんな夢のキャストを組めるだろう? 主役ドン・カルロは世界でひっぱりだこのスーパー美男テノール、ヨナス・カウフマン、エリザベッタは絶大な人気を誇るベルカントの女王パルバラ・フリットリ。この二人による愛の二重唱を、どうして聴きのがすことができるだろう?。フィリッポ二世は世界最高のバス、ルネ・パーペで、ロドリゴは美声のデイミトリ・ホロストフスキーと美形スターがずらり。「ドン・カルロ」は父フィリッポと息子カルロの宿命の対決を軸に、憂愁の王子カルロと義理の母エリザベッタの許されざる恋や、絶世の美女エボリ皇女の嫉妬と裏切りがからむ壮大なスケールの歴史絵巻。

イタリア語5幕版という長年メドで人気を博したどっしりと重厚な舞台が日本にやってくる。

石戸谷結子 (音楽ジャーナリスト)

スーパーキャストが大集結!
こんなに豪華なキャストはニューヨークでも見られない!

ヴェルディ ドン・カルロ

全5幕
イタリア語版



Donizetti Lucia di Lammermoor

Opera in three acts

Conductor: Gianandrea Noseda

Lucia: Diana Damrau, Edgardo: Joseph Calleja (June 9 & 12) / Piotr Beczala (June 16 & 19)

Enrico: Željko Lučić, Raimondo: Ildar Abdrazakov

【上演時間 約3時間10分／休憩2回含む】

Approximate Running Time: 3hrs. 10min. /two intermissions

指揮：ジャンアンドレア・ノセダ

演出：メアリー・ジーマー

衣裳：マーラ・ブルーメンフェルト

照明：T. J. ジャーケンス

振付：ダニエル・ペルツィク

予定される主なキャスト (変更になる場合がございます)

ルチア (S): ディアナ・ダムラウ

エドガルド (T): ジョセフ・カレヤ (6/9, 12)

ピョートル・ベチャワ (6/16, 19)

エンリーコ (Br): ジェリコ・ルチッチ

ライモンド (B): イルダール・アブラザコフ

◎あらすじ

17世紀のスコットランド。領主エンリーコの妹ルチアが愛する相手は、兄の仇敵エドガルドだった。エンリーコはルチアとエドガルドの仲を裂き、一方でルチアを別の相手と政略結婚させる策略を巡らす。エドガルドに裏切られたと思い込んだルチアは、悲しみのあまり狂乱してしまう。そして婚礼の場は血染めの悲劇となるのだった。

◎みどころ

政略結婚の悲劇をドラマティックな旋律美で彩る《ランメルモールのルチア》。磨き抜かれた声の技を要するベルカント・オペラの傑作だが、今回は女性演出家ジーマーの独創性にまずは注目。実在の古城をモデルとする舞台装置が貴族社会の重圧感を象徴し、幽霊の存在も視覚化されて恋人たちの末路が判りやすく浮かび上がる。主演はドイツの

若き名花ダムラウ。世界中を唸らせる銀色の美声とテクニックの切れ味は、生のステージでぜひとも堪能頂きたいところ。そして、相手役のエドガルドにはマルタ島の新星カレヤとポーランドの名手ベチャワが情熱みなぎる歌声をそれぞれ披露、敵役のルチアの兄エンリーコではセルビア出身のルチッチの苦みばしった響きが頼もしい。この強力な陣営を纏め上げるイタリアの指揮者、ノセダの手堅い采配ぶりも大いに期待される。

岸 純信 (オペラ研究家)

圧倒的な人気と実力を誇り、世界が注目する大型ソプラノ・ダムラウ
いよいよMETで初来日！

ドニゼッティ ランメルモールのルチア 全3幕



METの花形ネトレプコ、クヴィエチェンを迎えた、
ニューヨークでもチケットが手に入らない垂涎のコンサート、東京で実現!

ジェイムズ・レヴァイン指揮

メトロポリタン歌劇場管弦楽団 特別コンサート

The MET ORCHESTRA *Special Concert*



James Levine
conductor

Photo: Koichi Miura



Anna Netrebko
soprano

ソプラノ: アンナ・ネトレプコ



Mariusz Kwiecien
baritone

バリトン: マリウシュ・クヴィエチェン

Photo: Mikolaj Mikolajczyk

ドビュッシー
管弦楽のための映像
Debussy: Images pour orchestre

ヴェルディ
「椿姫」より第3幕への前奏曲
Verdi: Prelude to Act III of *La Traviata*

「椿姫」より“ああ、そほかの人か～花から花へ”
Verdi: “Ah, fors'è lui... Sempre libera” from *La Traviata*

ドビュッシー
牧神の午後への前奏曲
Debussy: Prélude à l'après-midi d'un faune

チャイコフスキー
「エフゲニー・オネーギン」第3幕より“ポロネーズ”
Tchaikovsky: Polonaise from Act III of *Eugene Onegin*

「エフゲニー・オネーギン」第3幕第2場より
Tchaikovsky: Act III, scene 2 from *Eugene Onegin*

【この公演に字幕はありません】

メトロポリタン歌劇場管弦楽団が定期的にオーケストラ・コンサートを行うようになったのは、1991年春のこと。METの管弦楽団にシンフォニックなレパートリーを日常的に体験させたいという、ジェイムズ・レヴァインの芸術的ヴィジョンに導かれてのことであった。以来20年余り、MET管弦楽団のコンサート・ホールにおける絶大な人気と評価は、すっかり定着した感がある。

MET管弦楽団の強みは、なんとと言っても毎日のように、世界のトップクラスの歌手の息遣いを間近に聴いていることにあるだろう。演奏の基本である歌うということが、シンフォニックなレパートリーでも、自然に息づいているというわけだ。来日公演のドビュッシーの演奏でも、そんな彼らの美点が大いに発揮されるに違いない。

そしてもちろん、オペラティックなレパートリーでは、アリアといえども全幕を知り尽くしている彼らの劇場経験が遺憾なく発揮される。東京では、アンナ・ネトレプコとマリウシュ・クヴィエチェンという、今絶大な人気を誇る二人が、それぞれMETの本舞台ではまだ歌っていないレパートリーに取り組むというのも楽しみだ。

ピットを抜け出したMET管弦楽団、歌劇場では味わえないそのダイナミズムに、是非注目していただきたい。

小林伸太郎 (音楽ジャーナリスト)